



写真等無断転載禁止

2026. 6. 8発行 ニュースレター第346号

〒262-0019 千葉県花見川区朝日ヶ丘 5-24-2

TEL. 090-7941-7655 FAX: 043-483-0027 代表: 小西 由希子

E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com , Home Page: <http://www.ceic.info/>

海の環境問題に取り組む学生ワークショップ参加報告

東邦大学 生命圏環境科学科3年 千葉市若葉区 鈴木 郁也

令和8年3月8日から3月13日の計6日間「海の環境問題に取り組む学生ワークショップ」に参加してきました。

本ワークショップは、環境省をはじめ複数の大学・研究機関の協力で開催され、会場は東京都の国立オリンピック記念青少年総合センターで行われました。開催趣旨として、全国から集まった有志の学生が海の環境問題を学び、参加者同士の議論を通じて、未来に向けた解決策を立案・実践につなげることを目指しています。

参加した動機は、全国の環境意識の高い学生たちが、どんなことを考えているのかが気になったからです。この取り組みを通して、これからの日本を引っ張っていく人たちと出会い、環境保全の未来を見られることを期待していました。

まず0日目に開催された任意参加プログラムにより、大手町の3×3Lab Futureというコワーキングスペースに集合しました。都市と生物多様性に関する座学を受けた後、皇居前に造られた自然体験空間「ホトリア広場」とお濠の「浄化施設」を見学しました。5日間共に過ごす仲間たちと初めて顔を合わせる事となりましたが、この短い時間で意気投合し、まるで旧知の仲のように語り合う光景も見られました。

翌日から、いよいよ国立オリンピック記念青少年総合センターに集まり、4泊5日の共同生活が始まりました。

参加した学生は34名、事前に行われたアンケート調査によって、4つのテーマで各2チームずつに班分けされました。テーマは①海域環境の生物多様性.②海域環境と地域創生.③海洋プラスチック.④海域の経済的価値の4つが設定され、各チームがテーマの環境問題に対して提案を作成することとなりました。

私が配属されたテーマは④海域の経済的価値でした。
①生物多様性を強く希望していたのに、希望度の低いテ

ーマに配属されて自信を持たず、つい不満を漏らしてしまうこともありました。

ある時、班分けを担当された先生から「環境問題に対して空虚な議論にならぬように、各班に1人は生き物や環境がわかる人を入れた」という説明と共に、励ましの



2日目.荒川放水路.マイクロプラ拾い

言葉をかけてもらいました。それから、私はチームで自分の役割に誇りを持ち、ディスカッションに臨むことが出来ました。

スケジュールは、1日目.座学・グループ討論.2日目.荒川放水路とふなばし三番瀬海浜公園へ赴いてフィール



4日目.グループ討論

ドワーク、そして討論.3日目.討論・座学・討論.4日目.提案作成の作業とその為の議論討論打ち合わせ……。そして、5日目には積み重ねた論理の集大成である提案発表を行いました。それぞれのグループが描く、

海の環境問題の未来を、研究機関や企業・関係者の皆様の前で語りました。



海の経済チーム2のメンバー(左から2番目が私)

これらの経験は酸いも甘いも、青春の1ページとして若者たちの心に刻まれ、これからの人生を豊かにしていく学びの時間であったと噛みしめられることでしょうか。先人たちの期待を背にして、若者たちが希望を語り合う、これほど素敵にあつらえられた機会はありませんで

した。

私自身もこの6日間を通して自らの特性と強みを省みることが出来ました。これまでの学生生活で取り組んできた生物多様性・環境保全活動の経験は確かな自信となり、私の信条である“フィールドワーク”を通して自然と人、人と人々を繋げる活動に自分の使命を感じました。

私は千葉へ帰ってきてからすぐに、自身の自然の原体験である“谷津田”へ出かけました。次に外房の海へ、今度は三番瀬の干潟へ……その時、現場に行かなければ知りえない人と自然の関わりを、東京に集まった同志たちに体験させてあげられなかったことを非常に惜しく感じました。次会う時には是非とも砂か泥の上で、あるいは網を持って生き物を追いかけてながらでも語り合えたらなと思いました。

もっとも、そんなことをしていたら、議論に頭を使っている暇はないのですが。

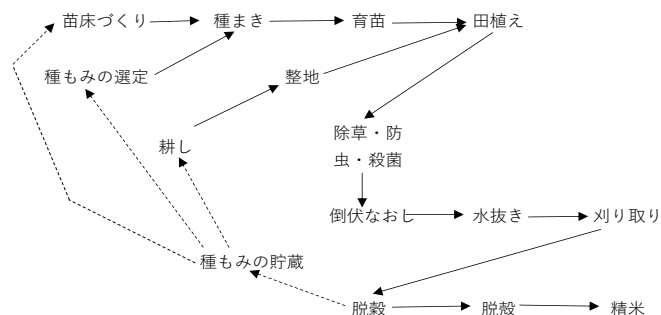
子どもが自然とゆたかにかかわるために 大人がしなければならない事を考える その2 ～子どもの農作活動にどのようにかかわればよいか～

子どもと自然学会 船橋市 岩田 好宏

子どもの農作活動には、その目的から考えますと、およそ次のa～eの5つがあります。

- a. 農作 b. 農作学習 c. 生物学学習
d. 農業学習 e. 自然保護学習

aの農作というのは、楽しく農作を進める活動です。bの農作学習は、次の図のような農作業のそれぞれの意味を学ぶことを目的とした活動です。これにはこの中のどれか、あるいは複数のもの、種まき以外のすべてを欠いた栽培をして、それと比較するという方法が必要です。また収穫したものを食べるなどの利用をすることが必要です。



cの生物学学習は、次の2つのことに関する学習を目的とした活動です。

- i. 農作活動を通じて生物体(個体)の‘生まれ、環境との対応関係の中で、自体で育ち、殖え、衰え、死ぬ’という「生きている」過程

- ii. 持続個体群の‘前世代から後世代に交代する時、後世代の個体数が前世代の個体数と同じ時持続する’という「生きたつながり」過程

これには、収穫物である種子や芋・球根を食べるなどの利用をしないで、次の時季に種まきして、あるいは植えて、作物(植物)の次の「生きている」につなげることが必要です。これは、生物がどのようになっていれば存続できるかということを知る学習になりますから、eの自然保護学習の基礎にあたるものとなります。dの農業学習は、どのようにしたら農業者の生活が農作を軸にして成り立つか、農作をどのように進めれば産業として人々の食物その他の有用物の確保と環境保全に役立つかという社会的なことが具体的な学習課題になります。子どもの実際の農作活動は、これらとの関係の中で進められる必要があります。eの自然保護学習としての農作活動は、農作が自然保護にとってどのような意味をもっているか、どのようにしたら自然保護と農作が両立することができるかを明らかにすることを目的としています。農作・農業の実際から学ぶことと、本やインターネットなどを通じて人間の生物世界とのかかわりの歴史の中から何を学習するかを、子ども自身が選び出し、実際の野外での活動と結びつける必要があります。

トウキョウサンショウウオとアライグマ

香取市 濱中 修

トウキョウサンショウウオとその保護活動

匝瑳市にトウキョウサンショウウオが棲んでいて、保護活動が行われています。匝瑳市の中心街は、八日市場駅のまわりで、その北は台地です。この台地には、谷が枝分かれした木の枝のように入り込んでいます。谷底は田んぼで、谷の斜面は林に被われています。ここにトウキョウサンショウウオがいます。

トウキョウサンショウウオは、親（成体）でも体長が10cmを少し超える大きさの動物です。サンショウウオは、両生類ですから、水の中に卵を産み、赤ちゃん（幼生）は水中で育ちます。トウキョウサンショウウオは、春に産卵します。産卵場所は、流れのない水たまりです。孵化した赤ちゃんは、夏の終わりころまでには変態して、陸上生活をする子ども（幼体）になります。

千葉県では、台地が浸食されてできた谷を谷津とよび、谷津の田んぼを谷津田とよんでいます。昔、谷津田は、一年中水がたまっている湿田でした。谷津は、稲作に必要な水を必要ときに運んでくることができない場所だったからです。谷津田にはいつも水がありましたから、そこに産卵すれば、トウキョウサンショウウオは、赤ちゃんから子どもに育つことができました。

土地改良事業が進められて、谷津にも水を送るパイプラインができました。今では、バルブを開けば谷津田に水が入ります。谷津田は、稲作に必要な時季にだけ水を入れる乾田に変わりました。田植え前の乾田には水がありません。田植えからしばらくの間は、乾田にも水があります。しかし、田植えから1カ月を過ぎると、乾田では再び水がなくなります。いったん田んぼの土を乾かしたほうが、お米がたくさんみのるからです。谷津田は、乾田に変わって、トウキョウサンショウウオの赤ちゃんが育つ環境ではなくなりました。

谷津田の代わりになる水たまりが必要になりました。千葉県野生生物研究会の八木幸市さんたちは、地元の農家の協力を得て、斜面林と谷津田の間に溝を掘って、トウキョウサンショウウオのためのビオトープ（人工の水たまり）をつくりました。台地の上に降った雨は地面にしみこみ、斜面の下端で湧き出します。だから、この位置に溝を掘れば、水が涸（か）れることはありません。

トウキョウサンショウウオとアライグマ

3月24日（火）、八木さんにトウキョウサンショウウオのためにつくられたビオトープを案内していただきました。見学者は、私とA先生、それにA先生が「生物基礎」を教えている東京の女子高校生2名の計4名です。

ビオトープの隣の田んぼにアライグマの足跡がありました。アライグマは、水辺の動物を捕らえて食べます。トウキョウサンショウウオの赤ちゃんが食べられてしまいます。アライグマは駆除しなければなりません。



アライグマ

トウキョウサンショウウオは、環境省レッドリストにも載っている絶滅危惧種です。絶滅は、1つの種が地球上から消滅することを意味します。アライグマは、原産地の北米でも生息数が増えていますから、今のところ地球上から消滅する可能性はありません。日本に渡ってきたアライグマは、駆除している。

私も高校で「生物基礎」を教えていました。私は、アライグマなどの外来哺乳類を駆除する方法について考える宿題を出していました。「殺さないで……」と書く生徒がたくさんいました。動物の命を奪うことにとまどいを感じるのは、人間として普通のことです。サル＞哺乳類＞……というように、相手がヒトと類縁関係が近い動物であるほど、その気持ちが強くなります。

私はクマ猟が行われていた魚沼市（新潟県）で生まれ、ツキノワグマの肉を食べて育ちました。野生動物の命を奪うことに強い抵抗感がありません。私のような感性をもつ人間は、今の日本では少数派であると思います。

トウキョウサンショウウオの数が減って絶滅が心配されるようになった原因は、その生息地の環境を人間が改変したことです。アライグマではありません。でも、アライグマを駆除しなかったら、トウキョウサンショウウオを始め、水辺で暮らす日本在来種の動物がよりいっそう命を奪われることになります。

新浜の話 100 ～自然観察案内人養成講座～

千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子

21世紀に入ったばかりの時代。観察舎担当の市川市農水産課課長になられた清水さんは、とても意欲的な方でした。観察舎を利用した「自然観察案内人養成講座」を始められたのは清水課長です。漁協さんをお願いして船で三番瀬の干潟をめぐる「三番瀬エコツアー」も同様。

NPO 法人になって日が浅い行徳野鳥観察舎友の会も、観察舎と保護区という「お城」にこもるだけではなく、城から打って出よう、という気運（圧力？）がありました。大黒柱さんたちを中心にスタッフも充実。SSCSのインターンさんたちをはじめ、意欲的な学生さんも多く、みなで企画をしたものです。このころ、私は少し中心から外れて事務仕事に追われていました。

最初は2001年の「入門篇」。11月の土日、3週連続。土曜日曜のどちらでも可で、全3回を受講した方には「修了証」をお渡しし、次の「学習篇」に進む、というものです。内容は1回目「スケッチをしてよく見よう」、2回目「鳥の種類を見分けてみよう」、3回目「野外で観察してみよう」。

続く「学習篇」は2002年度から。11月に「入門篇」を修了した方、またはそれに準ずる知識を有する方を対象とし、1～2月の隔週に実施。1回目は保護区の観察会、2回目は座学で保護区のおいたち・沿革の紹介、3回目は石亀明さんの「羽根から見た保護区」または加藤ななえさんの「カワウ大好き」のどちらか（両方でも可）をテーマとする保護区での観察（雨天時は室内）という内容。

2003年度からは9～10月に「実践篇」が加わりました。入門篇・学習篇を修了された方を対象とし、1回目は保護区での活動体験（カワウ営巣用やぐらへの補助枝とりつけ、または稲刈り）、2回目はスタッフがかかわる各地での保護活動の話（佐藤達夫；コアジサシの営巣、または川上正敬；鳥島のアホウドリ）、3回目は

入門篇参加者の指導体験（自分もスケッチをしながら、参加者のスケッチを見て描かれた鳥の種類をあてる・もしくは観察会の補助）でした。

入門篇・学習篇・実践篇はそれぞれ3回ずつ。保護区をもととして鳥や自然への興味を深めて行こうというものです。今にして思うと、ずいぶん背伸びをしたものだ、と。「農繁期」にきりがついた秋からとは言え、数少ないスタッフのうち二人が土日に各半日以上も手を取られるわけです。

参加者にはおおむね評判がよく、アンケートにも「新しい世界が開けました」等、よい評価が示されました。同じ内容を土曜日曜と2回ずつやっても定員をこえる勢いだった2001年、2002年でしたが、2005年あたりから参加人数が減り、2008年度には土曜か日曜の1回に絞ったにもかかわらず、定員割れになってしまいました。

いちばんよくなかったのは、9回もの講座を受講し終えた100名近くの方たちのアフターケア。活動の場を提供し、より先に進めるように準備したりサポートする、といったことが全くできなかったこと。受講者の中で輪が育つように仕向けることもできませんでした。ご自分で観察会等の活動補助や指導に加わった方もおられますが、ちゃんとしたルールは敷けずじまい。

しかし、これはいわば当然の結果。年に100回をこえる観察会、市内の小学校の半数近い見学、年300羽もの傷病野鳥の入院、「市川いきものマップ」、しんはま収穫祭、しめ飾り作り、元旦開館等々の数々の行事。加えて県から受託したカワウやサギの調査、三番瀬エコツアーの指導、市内各所での活動展示。いっぱいいっぱい。今も続く活動もありますが、「自然観察案内人養成講座」は2008年に終わり、以降は年に数回の公開講座の開催という方向で落ちつきました。

※今月号のスローマンはお休みします。

2026年度 ちば環境情報センター総会のご報告

ちば環境情報センター 代表 小西 由希子

5月30日、千葉市民活動支援センター談話室にて2026年度総会が行われました。正会員39名のうち、出席者12名、委任状15名、書面表決者2名の合計29名となり定足数20を超え、総会は成立しました。議長に南川忠男さん、議事録署名人に高橋久美子さんと田中正彦さん、書記に長正子さんを選出し、1号議案から定款変更に関する7号議案までを審議しました。いずれの議案も全員一致で承認されました。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター-2026年 7月号（第347号）の発送を 7月 6日（月）10時から千葉市民活動支援センター（千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階）にておこなう予定です。お手伝いいただける方は小西 090-7941-7655)までご連絡ください。

..... あなたも入会しませんか

住所〒 _____

ふりがな _____
氏名 _____ Tel _____

E-mail _____

会費の郵便振替口座は00130-3-369499です。

編集後記：千葉県緑区下大和田町開発計画に係る環境影響評価準備書に対して20通の意見書が出されました。その後事業者から見解書が提出された後千葉市で初めての公聴会が開催(5/16)されました。これは環境保全の見地から意見を有する者の意見を聴くというもので、12名が公述しました。防災、交通安全、地下水保全、生物多様性、景観など多方面から意見が述べられました。今後審査会での議論を経て市長意見が出されます。 mud-skipper ♀

☆大椎小学校田んぼ田植え 5月13日(水) 晴れ

大椎小は5年が1クラスだけの17人。でもみんな初めての田んぼにワクワクの元気いっぱいできやかな声が谷津に響きます。最初に全員で自然観察。生きものに触れる経験があまりないのか、カエルに触れるのも嫌がる子が多いようでしたが、だんだんと慣れてきてザルを使って様々な生きものを捕まえていました。最後に大きなヘビが出てきて、捕まえてもらったのを恐る恐る触ってみました。田植えはロープに沿って並んでみんなで一斉に植えます。最初は素足に触れる泥の感触が気持ち悪かったり、泥の中を歩くのがおぼつかなくなったりでも、だんだんと慣れて楽しくなってきた様子。自分の分を終えて、“もっと植えたい！”と追加で田植えする子もいました。保護者の方々をはじめとしたボランティアが大勢参加してくださり、田んぼ全部に田植えができました。これからの生長が楽しみです。

報告：高山邦明

【谷津田・季節のたより】 2026年 5月

<下大和田町> 報告 平沼勝男

5/2 ヤマサナエ 2頭確認。若く美しい個体。シオカラトンボの羽化したての個体もいたが、すでにたくさんの成虫が田んぼを飛び回る。モンキアゲハ、アオスジアゲハ、キタテハ飛ぶ。シュレーゲルアオガエルを飲み込むヤマカガシを発見。新 YPP 田んぼにミナミメダカを初めて確認。ここまで昇ってきたようだ。同じ場所でシュレーゲルアオガエルのオタマジャクシを多数確認。 5/5 トンボはヤマサナエ、シオカラトンボ、シオヤトンボ、ニホンカワトンボ、ホソミオツネトンボ。チョウではモンキアゲハ、アオスジアゲハ。鳥のさえずりはキビタキが盛んに鳴く。他にオオヨシキリ、コジュケイ見かけた鳥はコゲラ、アオサギ、セグロセキレイ、ツバメ。ツバメは畔で泥を取っていた。 5/9 新 YPP 田んぼに苗を植えました。緑米と赤米。

<小山町> 報告 無記名は高山邦明

5/3 足の生えそろった小さく真っ黒なヒキガエルが上陸。 5/4 田んぼに小さなエビがたくさんいた(碓夕子)、ホソミオツネトンボが産卵。 5/5 クサシギがオタマジャクシを食べていた。越冬で長く滞在していたクサシギの姿はこれが最後。 5/6 最近急に増えたエビが「ミナミヌマエビ」という中国原産の外来種であることが判明(阿部洋志)。 5/7 シオカラトンボの羽化がはじまる。 5/8 エゴノキやテイカカズラが開花。 5/9 ホトトギスの初鳴き。 5/10 スイカズラやノイバラが花開く、モズとキセキレイが争う。 5/12 ウツギ(ウノハナ)、ガマズミ、ドクダミ、キツネノマゴなど夏の花が次々と咲き始める。 5/15 セグロセキレイの幼鳥が餌をねだっても親は与えない、子別れか。 5/16 ツバメが田んぼで泥集め。どこかで巣を作っているのだろう。 5/17 田植えをしているとメダカの稚魚がたくさんいた(渡辺明美)。 5/20 ニホンリスが2頭、クワの実を食べに来ていた。黒く熟した実だけを選んでいる。 5/23 ホタルブクロが咲く。キセキレイの幼鳥が餌をもらっていた。 5/24 田んぼに30cm近いミシシippアカミミガメがいた(江澤元太)。 5/26 ガビチョウがクワの実を食べていた。 5/27 ノシメトンボやオオシオカラトンボが羽化、ツユクサが咲く、ウグイスの幼鳥の声がした。 5/28 サルトリイバラにルリタテハのトゲトゲの幼虫。 5/29 キイトトンボが羽化。

【イベントのお知らせ】 主催：NPO法人 ちば環境情報センター

<下大和田谷津田> 連絡先：小西 TEL. 090-7941-7655 , E-mail : yatsudasukisuki@gmail.com

・森と水辺の手入れ

日時：2026年 6月21日(日) 9時45分～12時 雨天中止

内容：田うえをした緑米田んぼの整備をします。森の下草刈りも行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・第319回 下大和田 YPP 「田の草取り」

日時：2026年 6月27日(土) 9時45分～12時 雨天中止

内容：コナギなど中心に田んぼの草取りをします。地味ですがたいせつな作業です。

持ち物：長靴、長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物など 参加費：無料

・森の手入れ

日時：2026年 6月28日(日) 9時45分～12時 雨天中止

内容：森の木の整備や下草刈りを行います。

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物 参加費：無料

・第318回 観察会とゴミ拾い

日時：2026年 7月 5日(日) 9時45分～12時 雨天決行

内容：カブトムシやクワガタムシも現れる頃です、緑濃く生き生きとした木々の森と谷津を巡ります。

持ち物：筆記用具、飲み物、長靴、帽子、ゴミ袋、敷物 参加費：100円

<小山町谷津田> 連絡先：高山 E-mail : ceic.ypp.oyama@gmail.com

▼第246回 小山町 YPP 「田んぼの草取り」

田んぼの草取りや畦の草刈りをします。

日時：2026年 6月21日(日) 9時～12時 ☆小雨決行

場所：小山町谷津田(千葉市緑区)

持ち物：田んぼ用長靴(もしあれば)・防水手袋・飲み物

☆どなたでもお気軽に参加いただけます。初参加も歓迎です！参加のご希望、お問い合わせは、上記メールでご連絡下さい。

